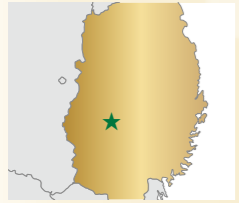


優秀賞

野火太プロジェクト

— 屋外焼却行為を原因とする火災の予防啓発グッズ
開発プロセスから小学生が地域課題として
火災予防を学習する機会を創出しよう! —



岩手県 花巻市消防本部

事例類型	I 実効性向上 IV 他団体との連携 VI 広報活動
取組期間	令和5年5月から

● 背景

本市消防本部が管轄する花巻市は人口約9万人、東を北上高地、西を奥羽山脈に挟まれた北上盆地の中心に位置する豊かな自然に囲まれた地域である。例年、屋外で行われる焼却行為を原因とする火災（以下、野火火災）が多発し、1年間の火災原因の約3割を占める状況である。しかし、市民がその事実をほとんど認識していないことが予防啓発を推進する上で課題となっている。

また、本市では平成30年から慶應義塾大学 SFC 研究所イノベーション・ラボと連携し、地方創生プロジェクトを開発・実践する「花巻市地域おこし研究所」を設置しており、その研究テーマの1つとして、本市で多発している野火火災を予防することを目的として、令和5年度から消防職員が研究活動に取り組んでいる。

● 内容

①過去5年間に発生した野火火災のデータの洗い出し

研究活動に伴い、基礎データとして過去5年間に発生した火災の関係者の属性及び行動、当日の天候等、市内で発生した火災の特徴を分析するために詳細なデータ収集を行った。その結果、本市で発生した野火火災には「高齢者が関係していること」「平均風速約3m/s程度の日に発生することが多い」という2つの特徴があることがわかった。

②野火火災予防啓発グッズ「野火太」の開発

①の結果から火災予防啓発グッズのターゲットを高齢者に絞り、市内で染物やのぼり旗を製造している株式会社小彌太（こやた）と共創し、「高齢者に風速3m/sを可視化」することをコンセプトに野火火災予防啓発グッズ「野火太（のびた）」を開発。野火太は屋外に設置する吹き流し状の啓発グッズで、風速約3m/sで水平になびく構造。

野火太の開発にあたり「高齢者へメッセージ性の高いデザインにしたい」「児童の火災予防に対する関心を高めたい」という2つの思いから、令和6年夏、市内学童クラブ2施設を利用する児童を対象に「野火太のデザインを考えようワークショップ」と題して、花巻市では毎年、野火火災が多発していることを地域の課題として学習し、火災予防の願いを込めたデザインを考えてもらうワークショップを開催し、その応募デザイン案から3点を野火太のデザインとして採用した。



全2回開催されたワークショップの様子



児童が考えたデザイン案から選ばれた野火太のデザイン

● 成果

①過去5年間に発生した野火火災のデータの洗い出しについて

過去の火災事例と再度向き合うことで、本市ならではの火災の特徴を認識することができた。特に、強風注意報発令時よりも穏やかな風速3m/sにおいて野火火災が発生しやすいという点については、風速に対する安全確認が不十分である可能性を示唆している。このことから、今後においても継続的な対策の実施が必要であると実感した。

また、今回は洗い出しの結果を活かし、広報の対象を高齢者とした。これは昨今、デジタル化が進む中でターゲットに合わせ、取って代わられる物理的な手法を選択することにつながり、今後の火災予防広報への汎用が期待できる結果となった。

②野火火災予防啓発グッズ「野火太」の開発について

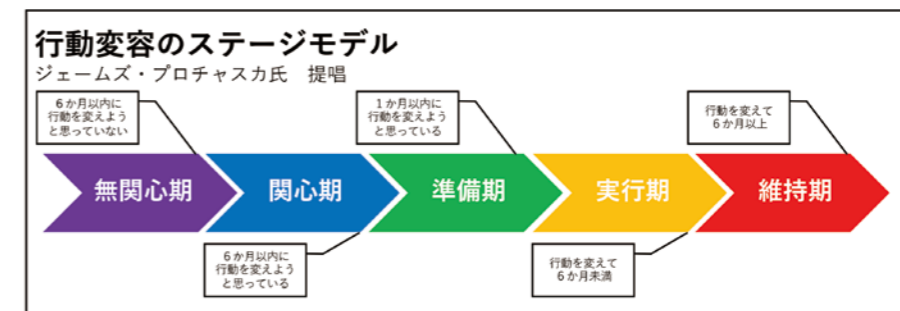
地元企業、学童クラブと共創して野火太の開発を行い、地域における火災予防の関係人口を創出できた。中でも開発プロセスで全2回開催したワークショップでは100名の児童から140点のデザイン案をいただき、火災予防行政に多くの児童が関わる機会を創出することができた。

また、ワークショップの参加者アンケートにおいては、「花巻では野火火災がたくさん発生している」という事実を家族、親戚、近所の住民にも伝えたいと意気込む回答が多くあった。このことから、火災予防行政において「子ども」の存在は貴重であり、「火災予防に関心がある子ども」を増やすため、継続的に同ワークショップを開催することで市民全体へ向けた火災予防啓発の底上げを図ることが期待できる。

グッズ自体の評価は、子どもたちが火災予防を学び、考えたデザインに強いメッセージ性があり、購入者からも好評だった。

● 特記事項

- 心理学者ジェームズ・プロチャスカ氏らが提唱した行動変容ステージモデルによれば、人が行動を変えるための第一段階として無関心期へ働きかけて関心期へ移行する必要がある。このことから今後も継続して、「火災予防に関心がある人」を増やすこととともに、維持期に向けて企業と共同で野火太の普及、火災予防を学ぶ機会の創出を継続し、さらには行動変容のステージを上げる手法の開発が期待される。



- 令和7年4月から、株式会社小彌太から販売された野火太は、約半年で市内を中心に約30本が販売され、同年2月に多発した山林火災の影響もあり、現在も多くの問い合わせをいただいている。また、購入の支援として、活用できる補助金メニューの掘り起こしと、その案内に努めている。
- 野火火災というテーマに取り組むにあたり、最終的には火災の件数及び被害の減少を目指すことが目標ではあるが、前段階として地域住民が火災予防を「おらほ（私たち）の問題」と捉えてくださることを目指し、積極的に取り組む貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げる。